

## 十、誰のために

とうとう……。

炎をあげて燃えさかる山塞さんさいを出発し、山道をくだりながら、私は感慨に耽ふけった。  
はじめて水野ハナに出会ったのは、半年前の三月、ブラゴベシチェンスクへ向かう船の甲板上だった。支那人少年に扮した彼女は、酔っぱらった日本人に絡からまれ、相手の股間を蹴り上げて倒したのだった。

一人通れる幅しかない山道だった。ハナ、ソヒョン、宋紀ソンヂイら馬賊たちは、山塞には火をかけ、詰めるだけの食料と武器を雑囊に入れて背中に背負い、一頭ずつ馬を曳ひきながら、山を下りた。私も、馬を一頭あてがわれた。

私の前を、ソヒョンが馬を曳きながら、鼻歌をうたっていた。

朝鮮人とロシア人の血を引く十二歳の美少女との出会いは、瓊瑋あいくんで私が尾けているのに気づいたハナが、彼女が経営する客棧クワン（旅館）「聚英棧ヂイインヂェン」で働いていたソヒョンに命じて、私の股間を蹴らせた時だった。冷静に敵を始末する俊敏なナイフ使いであり、早熟で聡明な美少女には、ずいぶんと助けられた。

山を下りて平原に出た時、ちょうど夜が明けた。東の空から太陽が顔を出し、広大な大地を照らし出した。

小さな池の畔ほとりでハナは休憩を命じた。馬賊たちは、馬に水を飲ませ、朝食をとった。

「宋紀ソンヂイ」

ハナは一の部下を呼び、他の者から離れた場所に移動した。ハナに何かを囁ささやかれ、宋紀は驚いた面差しになった。何やら抗議していたが、やがて納得したらしい。立ち上がったこちらを向き、私とソヒョン以外の馬賊たちを呼び寄せた。

「ヨク、クオンクオン（やっぱり、そうか）……」

私と二人、池の畔に残されたソヒョンは、眼を閉じて溜息ためいきをついた。

ハナに呼ばれた七人の馬賊たちも、口々にわめきながら抗議していたが、ハナと宋紀に説得されたらしく、うなだれて池に戻ってきた。

「再見ツァイジン（さようなら）」

「改天見ガイタイエンジン（また、会おう）」

彼らは口々にそう言いながら、私やソヒョンと抱擁をかわし、宋紀を先頭に馬に跨またがって駆け去った。

「あいつらは、別の首領に預かってもらう事にした」

ハナが池の畔に戻ってきて、私とソヒョンに説明した。

「ユキに会えるのは嬉しいけれど、どうも嫌な予感がするんでね……」  
それから、砂塵を巻いて駆け去っていく馬賊たちに眼をやって言った。

「あいつらを巻き込みたくない。でも……お前たちには、一緒にいてほしいんだ」  
ハナは俯き、頬を赤らめながら言った。

「怖いんだ、なんだか……」

ソヒョンは無言でハナに歩み寄り、強く抱きしめた。ハナは甘えるように、小柄なソヒョンにもたれかかり、その小さな肩に頬を押しあてたまま動かなかった。しばらくそうした後、ハナは、私に顔を向けた。

「もう少し、あたしのわがままにつきあってくれるかい？」

「ああ」

頷く私に、ハナは、

「そう言ってくれると、信じてたよ」

嬉しそうに相手を崩し、右手を私の頬にあてた。

「行くよ！」

私たちは馬に跨り、哈爾濱に向かつて進み始めた。

何もない平原を、一週間かけて移動した。

「急いでも仕方ない」

ハナは、逸る気持ちを自ら抑えるかのように、言った。

「体をこわすだけだ。何が待っているか、分からないんだからね」

ハバロフスクのロシア総督が、ハナに十万ルーブルの懸賞金をかけた事は、すでに哈爾濱にも伝わっているはずだ。しかも、同じ額の賞金をかけられた劉春燕も哈爾濱にいる。どんな異がしかけられているか、わかったものではない。

やっと、哈爾濱の市街地が見えてきた時、ハナは、

「今日は、ここまでにしよう」

と言つて馬を降りた。高さ二メートルばかりの岩が地表から飛び出して、近くに三本の木が生えていた。

私たちは、木に馬を繋ぎ、手分けして野営の準備をした。簡易天幕を張り、近くで焚き火を熾した。焚き火が消えると虎や狼が襲ってくるかもしれないので、三交代で寝ずの番をする。一人目はソヒョン、二人目はハナ。私は、自ら三人目を志願していた。出発前に、ハナとソヒョンに睡眠時間を与えられるからだ。

乾し肉を湯で柔らかくして夕食を終えた後、ハナと二人、天幕に潜り込んだ。これまでのように、互い背を向けて横たわった。

「お前に、頼みがある」

不意に、ハナが言った。

「もし、哈爾濱で何かあったら、ソヒョンを守ってほしい」

「ソヒョンを……?」

「あの娘は、何があっても幸せになってほしいんだ」

私は返事することができなかった。ハナは、ソヒョンの名前だけを出した。三原ユキの名を口にしなかったのは何故だろう。

ハナは、そんな私の胸中を見透かしたように言った。

「ユキは、私に任せて」

続いて出てきた言葉に、私は、背筋が冷たくなる思いだった。

「もし、あたしをハル浜に呼び寄せた理由が、あたしを畏にはめる事だったら……」

ハナは、静かに、しかし決然と言った。

「ユキをどうするかは、あたしが決める」

ハナが一番恐れているのは、ユキが彼女を裏切る事なのだろう。ハナは、おとなしい娼婦だった十三歳の頃のユキしか知らない。水賊の首領の妻となり、大勢の男たちを動かす身となったユキは、ハナが知っているユキではない。

まず彼女に会い、本心を確かめてから、ユキにどう接するかを決めよう。あるいは、彼女に危害を加える羽目になるかもしれない。そういう状況になったとしても、自分以外の誰にも、ユキに触れさせたくない。それが、ハナの偽らざる気持ちなのだろう。

そこまで思いをめぐらせたとき、ハナが言った。

「ユキは、友だちだから……」

そう言ったとき、ハナは口を開かなかった。

翌朝。

大平原の東、ハル浜の市街地が広がる地平線から太陽が顔を出した。

「おはよう」

寝ずの番をしていた私の背後で、天幕から出てきたハナが言った。ハナと並んでソヒョンが、眠そうな眼をこすっている。

乾パンを水に浸しただけの簡単な朝食を終えた後、

「二人に、偵察を頼む」

とハナは、まずソヒョンを向いて言った。

「ソヒョンは、ユキと春燕がいる傳家甸を調べてきて。二人には見つからないようにね」

ソヒョンは心得顔で頷くと、着替え始めた。続いてハナは、私に言った。

「お前は、ハル浜市内を探ってくれ。ロシア軍の様子や、最近、怪しい連中が出没していないかどうか」

「わかった」

「ハル浜に、お前の顔を知っている者はいるか?」

「日本人が二人ほど」

洗濯屋の崔に紹介された在留日本人だ。ハナは気遣わしげに問うた。

「そいつらに見つからないよう、動ける？」

「なるべく、そうする」

私は言った。

「それに、連中とは一度食事をしただけだ。私のことなど覚えていないかもしれない。もし見つかったら、逆にいろいろと聞き出してみるよ」

「任せる」

ハナは笑顔で言った。

「とにかく、騒ぎにならないよう、気をつけてね」

「もし、ユキさんか、春燕に、見つかったら、どする？」

ソヒョンが口を挟んだ。彼女は、白い上衣チヨゴリに黒いスカートチマに着替きがえ了おえていた。髪はぼさぼさにし、顔を土で汚して、貧しい朝鮮人少女といういでたちである。

「そうだね……」

しばし考えて、ハナは答えた。

「もし、見つかったら、ここに案内して」

私とソヒョンは顔を見合わせた。ソヒョンは面差しを引き締めて問うた。

「相手が大勢、待ち伏せしていて、私たち捕まって、ここに案内しろ、そう言われたら、どうする？」

「おとなしく、言われたとおりにして」

ハナは答えた。

「どうせ殺されるなら、一緒のほうがいいじゃない」

ソヒョンは、嬉しそうに相好そうじょうを崩した。ハナも、笑みを浮かべて続けた。

「簡単には、殺されやしないけどね。お前たち二人とも、必ず助けるから、一緒に逃げ延びようぜ」

「ハナさんの助け、要らない」

ソヒョンは笑い、私を見上げていった。

「菊池さん、私が、助ける。ハナさん、相手、やっつけて」

「ソヒョン、お前は……」

ハナは、私の肩を叩いて笑った。

「彼の、保護者だったね」

私とソヒョンは、時間をずらして出発することにした。まず、ソヒョンが傳家フージャマ甸アジに向かった。それから三十分ほどハナと談笑した後、

「そろそろ、行くよ」

と馬に乗ろうとした時、

「待って」

背後からハナが歩み寄ってきた。振り向いたその時、ハナの顔が、私の顔を覆おおった。

柔らかな唇が私の唇に重ねられ、ハナの両手が、私の肩に回った。

そのまま、私たちは動かなかった。  
やがて、ハナは唇を離した。

「命を……」

ハナは、静かに、澄んだ眼差しで言った。

「大事にしてね」

そう言ってくるりと向きをかえ、天幕に入ったまま、出てこなかった。

「おや、あんたは……?」

ハルビシンのハル濱市内に入った私は、大通りを歩いていて、後ろから声をかけられた。

「確か、中尉殿……」

注意深く振り向くと、森という、崔の洗濯屋で出会った元陸軍軍曹だった。

「おお、やっぱり、中尉殿だ。お久しぶりです」

彼は、私の階級は覚えていたが、名前は忘れていたようだ。ちようどいい、彼から情報を得ようと、近くのカフェに誘った。店主はロシア人で、太ったロシア人女給仕が無愛想に応対した。

出酒らしのようなロシア紅茶にジャムを溶いて飲みながら、私は問うた。

「相変わらず、街中はロシア人ばかりですね」

「そりやそうです。支那人なんか、一人もいやしません。私だって、支那人に間違われぬよう、こーやって和服で歩いているんです」

袴姿の森は、そう言って苦笑いした。私は重ねて問うた。

「朝鮮人は増えましたか」

「そういえば、ここから一キロ先に、傳家甸という支那人集落だった村があるでしょう」  
ユキと春燕が、私たちからの知らせを待っている隠れ家のある場所だ。今、ソヒョンがいろいろと探っているはずだった。

森は続けた。

「三日前でしようか、その村に朝鮮人の一団が住み着いたそうです。別に商売をやるわけでもなく、何をしているんだらう、と気味悪がってる人もいますよ」

……まさか。

ハナは、畏が仕掛けられているのではないかと警戒していたが、その男たちが……。

「その朝鮮人たちは、何人くらいいるんですか?」

「三十人くらいだそうです。目つきの悪い、屈強そうな男ばかりらしい。清との戦争で国土を荒らされて以来、日本に反感を持っている朝鮮人は少なくない。斉齊ハルミに行った崔みたいに親日的な朝鮮人は稀です。だから、ここに住んでいる日本人は、薄気味悪がっている。ロシアの役人も、あそこには近づきたがらない」

そんな場所に、ソヒョンが一人で……。

私は居てもたつてもいられなくなった。

「用事を思い出しました。ここの勘定は私が持ちます。お先に失礼」

そう言うってお辞儀をし、呆気にとられた森を尻目に、私は店を飛び出した。馬場につないでいた馬にまたがり、傅家甸フイジャチンに向けて駆けた。

街道の先に、傅家甸の集落が見えてきた。私は馬を降り、近くの木につないで、警戒しながら集落に近寄った。人気ひとけはなく、不気味に静まりかえっている。ここに住み着いたという三十人の「朝鮮人」はどこにいるのだろう。

私は、背負っていた雑囊リュツクから拳銃を取り出し、お腹のベルトに挿さして集落に入った。やがて、ユキの隠れ家がが近づいてきた。足音をたてぬよう、ゆっくりと歩いた。

通りに向いた窓は、カーテンが下ろされていた。そのカーテンがかすかに揺れて、隙間から人の顔が覗のぞいた。

その時、隠れ家のドアが開かれ、人が飛び出してきた。

三原ユキだった。

「菊池さん、来ちゃ駄目！」

ユキは叫んだ。

「逃げて！ 早く！」

咄嗟とつさに何が起こっているのかわからなかった。

「どういことだ？」

そう聞き返した時、ユキは前のめりに倒れた。その背後に立っていたのは、背の高い女だった。

「你ニイ（お前は）！！」

女は、劉春燕リウチュンイェンだった。

そう思った瞬間、股間に重い衝撃が走った。春燕のつま先が、私の鞞丸に食い込んでいた。目の前が真っ暗になった。激痛が全身を貫き、嘔吐がこみあげた。

「菊池さん、なぜ、ここ、来た！」

後ろ手に縛られて部屋の隅に転がされていたソヒョンが叫んだ。

「ばかばかばか！」

涙目でわめくソヒョンに、春燕は歩み寄り、頬に平手打ちを食わせた。

「閉嘴ピンズエ（静かに）！！」

そう叱責され、ソヒョンは口をつぐんで春燕を睨にらみつけた。左の眼のあたりが赤く腫れている。家の外で様子を探っていたところを春燕に見つかり、格闘の末、捕縛されたのだろう。

食堂のテーブルには、橋口平助が座り、青い顔で震えていた。その周りを五人の男たちが囲んでいる。朝鮮人ふうの風体をしているが、喋っている言葉から、支那人であるのは明らかだった。

森が言っていた、三日前から傅家甸フイジャチンに住み着いた「朝鮮人」の一部なのだろうか。おの

おの、ナイフや拳銃で武装している。朝鮮人に化けたのは、支那人だとロシア軍に目をつけられるからだろう。

「お前も、余計な事、するな」

春燕は、腕を掴んで連れ戻したユキに向かって静かに言い、テーブルにつくよう仕草で促した。ユキはうなだれたまま、平助と向かい合って座った。

そして私といえは、ソヒョンの傍らで、春燕に蹴られた股間を両手で抑えて悶絶していた。激痛が股間から吹き上がり、全身に渦巻いている。立つことはおろか、息をするのも困難だった。

苦しみながらも、私は必死に脳を動かした。

春燕は最初から、ハナを捕まえるためユキに接触し、罨を張っていたのだ。そして、まふんと罨にはまった私たちがハナを迎えに出たのを見計らい、男たちを呼び寄せ、ユキと平助を監禁した。そして、ソヒョンと私は、まんまと春燕の目論見どおり、自ら罨に飛び込んでしまったわけだ。

「ハナは、どこ？」

春燕が、私を見下ろしながら問うた。

「ハル濱に、いるのか？」

「……いない」

私は必死に答えた。言葉を吐き出すたびに、またも苦痛が全身を苛み、吐き気がこみあげてくる。

「では、どこ？ 齊齊哈爾か？」

春燕が問うた。私は答えようとして、むせた。春燕は苛立ち、男たち二人に合図した。

二人の男が、私を仰向けにし、股間を押さえていた両手を離させ、股を開かせた。

そして春燕は、私の足と足との間に立ち、右足を上げた。彼女の踵が、私の辜丸に打ち込まれようとしている。そのまま、踏み潰されてしまうかもしれない。

恐怖に全身が強ばった。

「やめて！」

ユキが叫んだ。

「春燕、やめて！ この人たちを痛めつけて、ハナに知られたら、どんな目にあうか、わからないわよ。ハナは、私を手込めにした日本兵を六年かかって探し出し、復讐したような人なのだから！」

春燕は、しばらく冷ややかな眼差しでユキを見つめていたが、やがてゆっくりと足を床におろし、男たちに合図をした。

二人の男が私に歩み寄り、ズボンを脱がせ、水で冷やした布を股間にあてがった。

それから二時間ほど寝かされて、私はやっと激痛から立ち直った。まだ鈍い痛みは残っているが、なんとか椅子に座って会話ができるくらいには回復した。

私は、ユキや平助と同じテーブルに座らされたが、反抗的な態度を崩さないソヒョンは、

縛られたまま、部屋の隅に転がされていた。

四人の男たちが、私たちを見張っていた。春燕は、副官らしい男と別室に籠っていた。今後どうするかを話し合っているらしい。

やがて、春燕が戻ってきた。テーブルに座り、私に向かって言った。

「今から、ハナのいるところに、案内しろ」

私は迷った。どうすれば、ハナを罠にはめずにすむのか、ソヒョンやユキ、そして橋口平助を救うことができるのか、必死に考えをめぐらした。

「どうなんだ！」

春燕がテーブルを拳で叩いた。平助が小さく悲鳴をあげた。

ふと、部屋の隅のソヒョンと眼があった。ソヒョンは<sup>まぶた</sup>瞼と<sup>あご</sup>顎をかすかに動かした。

春燕に従え、という事のようにだった。

私は、今朝、ここに来る前に、ハナとソヒョンがかわした会話を思い出した。「もし、相手が大勢待ち伏せしていて、私たちが捕まって、ここに案内しろと言われたらどうする？」と問うたソヒョンに、ハナはこう答えたのだった。

——おとなしく、案内してあげて。

「わかった」

私は、答えた。春燕は、<sup>けわ</sup>険しい面差しを崩さず、さらに問うた。

「ハナは、一人か？」

「そうだ」

「ここから、どのくらい、かかる？」

「馬で、二時間だ」

春燕は、柱時計に眼をやった。午前十一時だった。

「<sup>タイムアップ</sup>大家集合（全員集合させる）」

春燕に命じられ、一人の部下が外に出ていった。やがて、家の外に足音や野太いわめき声が響いてきた。大勢の男たちが集まってきたのだ。

春燕は、屋内に残っていた四人の部下に命じ、ユキと平助を椅子に縛り付けさせた。

「日が没するまで、私、帰らなければ、一時間ごと、一人ずつ、殺させる」

春燕は、<sup>まばた</sup>瞬きもせず私を凝視しながら言った。

「嘘ついたら、みな、死ぬ」

そして、私を促して、外に出ようとした。その時、

「待って！」

ユキが叫んだ。

「私も、連れて行って！」

春燕が足を止め、ふりかえってユキを見た。ユキは、縛られたまま、身を振りながら、なおも叫んだ。

「あなた、ハナを殺すつもりなんでしょ！」



春燕は答えなかった。ユキは続けた。

「ハナは、私の恩人なの！　せめて最後に一目、顔を見たいの！　お願い！」  
そう言い切って嘔び泣くユキをしばらく見つめていたが、やがて、部下の一人に何かを命じた。部下は、ユキを椅子に縛り付けていた縄を切った。

「我很感激（感謝します）、春燕」  
幾度も頭を下げるユキを、改めて後ろ手に縛り、春燕は家の戸を開けた。

隠れ家の外には、武装した三十人ほどの男たちが、それぞれ馬を曳いて集まっていた。

「出潑（出発）！」

春燕の声に、男たちは一斉に馬にまたがった。

この男たちは、何者なのだろう……？

大陸で出会ったなかで恐らくもつとも手ごわい劉春燕を中心、三十人の武装した男たちが、ハナ一人を襲撃するため、大平原に馬を疾駆させている。

私は、そんな男たちに混じって馬を走らせていた。手綱を握る私の前には、両手を縛られたユキが鞍にまたがっていた。そして、私の左隣に並行して、一人の男が馬を走らせながら、右手で小銃を構え、私の頭部に照準を合わせていた。私がおかしな真似をしたら撃つよう、命ぜられているのだ。

やがて、目印の岩が見えてきた。三本の木の一本に馬が繋がれ、簡易天幕が張られたままだった。

天幕の前には、人間らしい姿があった。両膝を立てて座り、膝と膝の間に頭を寄せて眠っているような姿勢だった。

着ている服は、ハナのものだった。

ユキが小さく叫んだ。それを聞きつけたように、

「あれか？」

劉春燕が私の隣りに馬を寄せ、天幕を指さした。

「そうだ」

そう答えながら、私は心のなかで叫んだ。

起きろ……。

起きろ、ハナ！

三十騎の馬が、全速で迫っているのだ。音が聞こえないはずがない。なのに、ハナは眠ったままのように動かない。ここに来るまでの長旅で、よほど疲弊しきっていたのか？

「預備（構えろ）！」

春燕が、右手を大きくあげて、命じた。男たちが一斉に、小銃を構え、天幕に狙いをつけた。

三十の銃口が、ハナを狙っていた。

頼む！

私は、叫びたかった。

起きてくれ！

春燕の右手が、振り下ろされた。

「放（撃て）！」

「だめ！」

「やめろ、撃つな！」

私とユキは同時に叫んだが、その声は、平原じゆうに木霊した三十発の銃声にかき消された。銃弾は、天幕を貫き、木の皮を剥ぎ取り、岩に当たって跳ね返り、眠っていた人影を弾き飛ばした。

「太好了（やった）！」

春燕が叫び、男たちが喚声をあげた。

「ハナ！」

私は絶叫し、ユキは顔を背けた。その頬には滝のように涙が流れ落ちている。

その次の瞬間。

私の隣で、私の頭に銃の照準を当てていた男が、悲鳴をあげ、落馬した。

その額から血が噴き出していた。

続いて、私から十メートル右のあたりで、爆発音が響き、五頭の馬が騎り手ごと吹き飛ばされ、血だらけになって地面に転がった。

「擲弾（手榴弾）か？」

私は上空を見上げた。細長い筒のようなものが空を舞い、私の左手、十メートルのあたりに落ちた。

爆発音。

四騎の馬と騎り手が空中に跳ね上げられ、地面に落下した。爆風でちぎられた手足が、ばらばらと降ってきた。

男たちは大混乱に陥った。続いて、三発目、四発目の擲弾が投げ込まれた。爆音が響きわたり、砂塵が濛濛と舞い上がった。砂塵が収まった時、草原には、春燕が率いた手勢の三十騎のうち三分の二以上の男たちが、無残な屍となつて転がっていた。

「在那辺（あそこだ）！」

一人の男が、天幕のすぐ側の小高い岩を指さして叫んだ。

岩の上に人の姿があった。

ハナだった。

右手に掴んだ擲弾を大きく振り上げながら、私たちを見つめ、左手で手招きし、何かを叫んでいた。

「菊池さん！」

ユキが振り返った。

「行きましよう！」

私が、ハナのいる岩山に馬頭を向けて駆け出すと同時に、五発目の擲弾が天高く放り投げられた。擲弾は、疾走する私の背後、十数メートルの場所に着弾した。爆音と同時に、またも砂塵が舞い上がり、私に降り注いだ。振り向くと、さらに多くの人馬が吹き飛ばされ、地面に叩きつけられていた。

岩山の下の特幕の前に近づくと、そこには、丸めた布を詰め込んだハナの着衣がずたずたになっていた。ハナはあらかじめ、多くの敵が押し寄せてくることを予想して、自分の身代わり人形を作り、岩の上に潜んで待ちかまえていたのだ。

私は、岩山の背後に回り、馬を下りた。

「じっとしてなさい」

鞍にまたがったままのユキを縛った縄を切り、馬から下ろしながら私は言った。

「岩陰に隠れたまま、顔を出さないようにね」

ユキを岩陰に坐らせ、私はそっと前方をのぞき見た。

おびただしい人馬の屍しかばねが転がる中、地上に立っているのは、春燕と、四人の部下たちだけだった。

岩の上ではハナが、小銃を構えた。すでに擲弾は尽きたらしい。

それを見て、春燕が叫んだ。

「突撃——」

春燕は、小銃を構えて駆けだした。四人の男たちも、それに続いた。

ハナは、二発続けて撃った。二人の男が悲鳴をあげて落馬した。なおも怯むひることなくハナに向かって発砲しながら馬を走らせる春燕の背後で、二人の男たちは、くるりと馬頭をめぐらし、春燕に背を向けて逃げ出した。

臆病風に吹かれたのも無理はない。三十人近くいた仲間が、水野ハナによって、全滅させられたのだから。

「站住ヂェンヂェウ（待て）！」

春燕は、男たちを振り返り、叫んだ。銃声が響き、一人の男が落馬した。もう一人も、数メートル先まで逃げられただけだった。二人とも、後頭部を撃ち抜かれていた。

「劉春燕——」

岩の上で、ハナが叫んだ。構えた銃口は、春燕に向けられていた。

逃げ去った仲間を眼で追っていた春燕は、ハナの声に慌てて銃を構え、発射した。構えが乱れていた。

ハナが発射した。銃弾は、春燕の小銃を吹き飛ばし、のけぞった春燕は、馬の鞍くらから放り出され、地面に叩きつけられた。

ハナは哄笑して叫んだ。

「銃の腕前は、あたしが上だね！」

それから、背後の私たちを振り返って叫んだ。

「ソヒョンは、無事なの？」

私は答えた。

「平助と二人、縛られて傳家甸の隠れ家に閉じこめられている。見張りが四人ついてる」

「たった四人？」

ハナは、微笑んだ。

「ソヒョンも舐められたものね」

そう言つて、ハナは岩山を滑り降りた。

「ハナ！」

ユキが叫んで、ハナに走り寄り、抱きついた。

「久し振り……」

ハナもユキを抱きしめたが、すぐに身を離れた。

「ごめんね。まだ、あいつの息の根を止めてないから……」

六年ぶりの再会に、眼を潤ませながら、ハナは背後を振り返り、まだ倒れたままの春燕を見つめながら、小銃を構えて歩き出した。

「動くな、劉春燕」

地面に叩きつけられた衝撃で呻いていた春燕が、やっと身を起こして立ち上がった時、すでにハナは小銃の銃口を、春燕の額に押し当てていた。

「正直に話せ。なぜ、そこまでして、あたしに会おうとした」

「殺せ」

春燕は、強ばった顔で呻くように言った。

「何も、言わない。殺せ」

「甘ったれるな！」

いきなり、ハナは、春燕の股間を蹴り上げた。春燕は悲鳴をあげ、左手で股間を抑えてうずくまった。立ち直る隙を与えず、ハナは続けざまに春燕の乳房を蹴った。

春燕は、左手で股間を、右手で乳房を押さえて、地面に俯せになった。全身が痙攣している。

ハナは、春燕の後頭部に銃口を押し当てて叫んだ。

「お前、一体、何人を殺したと思ってる！」

ブラゴベシチェンスクで、対岸の瓊瑤で、瓊瑤から齊齊哈爾までの街道で、夥しい数の支那人が命を落とした。哈爾濱でも齊齊哈爾では、ロシア軍の襲来を恐れた支那人たちが住み慣れた家を捨てて難民となった。同じ事は、他の多くの都市で起こった。

悲惨な虐殺の引き金となったのが、春燕のロシア軍人殺害だったのだ。

「お前は、何者なんだ！」

ハナは、俯せになつて悶絶する春燕の股間を再度爪先で蹴った。春燕が悲鳴をあげた。「義和団でも、紅灯照でも、ないんだろ！ 外国から支那を守ろうと立ち上がった

た義和団が、同じ支那人が大勢殺されるような仕掛けをやるはずがない！」

「誰のため？」

後頭部に銃口を突きつけられたまま、地面に倒れ伏している春燕が、苦しげに喘ぎながら言った。

「決てる。興漢会のため」

なるほど……。

ロシア軍人を殺害して、支那人虐殺を煽動した劉春燕が、清国に支援を受けていた義和団ではなく、異民族王朝である清国政府を打倒して漢民族国家の再興を期する興漢会の一味だとすれば、合点がいく。

「やっぱりね」

ハナは頷いた。

「最初から、お前が本当に義和団だとは、思えなかったよ」

「分てたか」

春燕は苦しそうな面差しで笑った。ハナは答えた。

「ああ……」

それから、春燕の背中に足を乗せ、春燕が悲鳴をあげて泣き叫ぶほど情け容赦なく圧迫しながら言った。

「義和団は、やり口は残忍だったけれど、彼等はあくまでも、西欧の侵略から同じ支那人を守ろうとしていた。でも、興漢会は、支那を漢民族の手に取り戻すためにや、手段を選ばない連中の集まりらしいからな」

興漢会のメンバーは、上流階級出身の学生くずれが多く、観念的で、苦しい庶民を助けるためでなく、自分たちの誇りを取り戻す事を優先しており、「革命のためには多少の犠牲はやむをえない」と唱えている事は、私も聞いていた。

さらに、ハナは言った。

「あたしに会いたがってるユキを利用して、ここまで大がかりな罠を仕掛けたのも、実はつまらない理由があるんじゃないかねえの？」

ハナに踏みつけられ、細かく震えていた春燕が、一瞬動きを止めた。

ハナは言った。

「あたしの首を、ロシア軍に持っていけば、ロシアが興漢会に金や武器を援助してくれるとかさ」

春燕は答えなかった。さきほどまで、ハナに責められ悶えていた彼女は、ぴくりとも体を動かさず、口をつぐんでいる。

それを見て、ハナは言った。

「やっぱり、そうか……」

それから、背後の岩山の陰から覗いていた私を見やって、怒鳴った。

「どうせ日本も、一枚嚙んでいたりするんだろ！」  
そのとおりだった。

漢興会の背後には、清国が倒れた後に内乱状態になるであろう支那大陸につけ込んで利権を漁ろうと野望を抱く、日本の国家主義勢力がいる。ハナが、自分に対して怒っているわけではない事は理解していたが、それでも私は、俯くしかなかった。

私自身、大日本帝国の軍人なのだから。

「なんでお前は……」

ハナは、顔を歪め、眼に涙を溜め、これまで抱えてきた怒りを爆発させるように、春燕の頭髪を掴んで、無理矢理、立たせた。またも悲鳴をあげる春燕に、ハナは怒鳴った。

「そうやって、つまんねえ連中の指図に従って、大勢、人を殺せるんだ！」

次の瞬間、ハナが絶叫した。

春燕の右膝が、ハナの股間を突き上げていた。

両手で股間を抑えてうずくまったハナに、苦しげに喘ぎながら春燕は叫んだ。

「なぜ？ 決てる！」

春燕は、ハナが取り落とした小銃を拾い上げ、その銃口をハナに向けた。

「自分が、生きる、ため！」

誰のために……。

そういえば、私は、大日本帝国陸軍軍人だった。

軍人として、人を殺した。なんの罪もない幼女をも。

誰のために？

お国のためだった。

でも今は……。

「去死チユイスルバア！(死ぬ)！」

かちり、と冷たい音が小さく響いた。

春燕が、ハナに向けた小銃の引き金をひいたのだ。だが、弾丸は発射されなかった。七発装填できるスペンサー銃だったが、ハナは、すでに弾丸を撃ち尽くしていたのだった。

春燕は咄嗟とつさに、銃の台尻をハナの額に向けて撃ち込んだ。ハナは体をねじって寸前かわすと、地面に転がるようにして春燕から離れ、起きあがると同時に、手に掴んだ砂を春燕の顔に投げつけた。一瞬、砂をかぶった眼を手で覆おおって怯んだ春燕に飛びかかろうとした時、不意に銃声が響き、ハナの足下で砂塵が舞い上がった。

数メートル離れた場所に、さきほど落馬した男が小銃を構えていた。立っているのもやつつのようなのだが、ふらつく足で血みどろの全身を必死で支え、喘ぎながら小銃のレバーを引いて弾丸を補填し、ハナに狙いを定めている。

「邪魔すんな！」

ハナは男に向かつて駆けだした。再び銃声。だがハナは倒れることなく男に駆け寄り、その股間を蹴り上げた。男は呻いてくずおれた。ハナは、男が取り落とした小銃を拾い上げ、男に銃口を向けて引き金をひいた。だが、銃声はしなかった。幾度もレバーを引いたが、機関部に砂が詰まったらしく、作動しない。ハナは、小銃を放り出し、倒れた男の喉笛を踵で踏みつぶして息の根をとめた。男は海老ぞりになり、そのまま絶命した。

次の瞬間、

「危ない！」

ユキが叫んだ。劉春燕が、凄まじい形相で、ハナに向かつて走り寄っていた。ハナが振り向いた時には、すでに春燕はすぐ間近に接近していた。春燕の身体が跳躍し、空中で一回転した。春燕の足が、咄嗟に避けたハナの鼻先をかすめた。春燕の飛び蹴りを危うくかわしながら、ハナは地面を転がり、離れた位置で立ち上がった。

二人の女は、両手をあげて身構えながら、対峙した。

「来るな！」

ハナが叫んだ。

岩山の陰から、二人のやりとりを見守っていた私とユキは、気づかぬうちに、ハナのそばに近寄っていたのだ。

私たちに掌を向けて制しながら、ハナは続けて叫んだ。

「あたしらに構うな！」

ハナは、油断なく春燕を睨みつけながら、静かな声音で言った。

「ユキ……どうやら、ここはいったん、お別れだ」

「え？」

ユキもまた、私の傍らに立っていた。眼を見開いて何か言おうとしたユキに、ハナは続けて言った。

「こいつとは、いずれ決着をつけなきゃならない。素手と素手で戦って、あたしが勝てるかどうか、分からない。もし、私が負けたら、こいつは必ず、ユキを殺す。だから……」

ハナは、言葉に詰まった。眼から涙を溢れさせていた。ハナは、私を見遣って言った。

「ユキを、哈爾濱に連れて帰ってあげて。それから、ソヒョンを助けてやってくれ。あたしは、こいつに勝ったら、必ず、哈爾濱に行くから。必ず、もう一度、ユキに会いに行くから……」

「ハナの言うとおり」

春燕が言った。

「あたし、ハナに勝つ。ユキさん、生かして、おけない。早く、行け」

「だめよ！」

ユキは絶叫した。

「なぜ、争うの！ 嫌いでもない相手と、なぜ、戦うの！」

その時……。

私の耳に、遠くから馬蹄の響きが聞こえていた。  
ハナと春燕も、西の方に眼をやった。

地平線に、馬に乗った人の群が現れた。少しずつ、こちらに近づいてくる。その数は、百人はくだらない。

「コサックか？」

ハナは、地平線を見つめながら、春燕に問うた。春燕は、困惑した面差しで頷きながら答えた。

「コサックだ……でも、なぜ？」

確かに、コサックの軍服だった。背中に小銃を背負っている。

ハナが言った。

「春燕、お前が呼んだわけじゃないのか……」

「もちろん」

「なるほどな……」

ハナは合点がいったように頷いた。

「あいつら、ずっとお前を尾けてた。あたしたち十万ルーブルの賞金首が、こうやって出揃うのを伺ってたってわけか」

「混 蛋（畜生）……」

春燕が歯がみして、呻いた。

「あいつら、最初から、金目当てだったんだ」

ハナは言った。

「興漢会を支援する気なんて、はなからなかったのさ。あんたにあたしを誘き出させ、二人とも首をとれば、賞金は合わせて二十万ルーブル。汚い筋書きだな」

「混 蛋（畜生）！」

口惜しそうに叫ぶ春燕に、ハナは静かに言った。

「なあ、一時、手を組まないか？」

春燕は意外そうな顔をした。ハナは続けた。

「お前も、たった一人であいつらを相手できるなんて、思ってたやしないだろ？」

無言で凝視してくる春燕に、ハナは歩み寄り、右手を差し出した。

「でも、あたしと組めば、なんとかなるかもしれないぜ」

春燕は、平原にちらばる三十人の屍を見廻した。それから、唇の端を歪めて小さく笑

い、ハナの右手を握り返した。ハナは笑った。

「決まりだ！」

ハナは、私のもとに駆け寄った。爪先を伸ばして私の唇に軽く接吻し、それからユキをぎゅっと抱きしめた。

「絶対に会いに行くから！」

そう叫ぶと、倒れた屍の手から小銃を拾い上げ、作動するのを確認してから、生き残



っていた五頭のうち一頭の馬に飛び乗ると、あっという間に駆け出した。

「ソヒョンとユキを頼んだぞ！」

そう叫んで、押し寄せる敵勢に向かって疾駆した。

茫然と見守る私の傍らを、もう一頭の馬が駆け抜けた。

「再見ツァイシェン（あばよ）！」

春燕が、そう叫んで駆け去った。

私たちは、茫然と百余の敵勢に向かって突進する二人を見送った。

「ハナさん！」

ユキが絶叫した。ハナが一瞬振り向いた。笑顔だった。

一瞬振り向いて、再び私たちに背を向けたハナは、急に馬首を右へと向けた。そのまま南へと走り出した。春燕もそれに続いた。私たちに向かって東へと寄せていたコサック兵たちは、慌てて南に方向を変えた。隊列が乱れ、互いに衝突して落馬する者も少なくなかった。

混乱するコサック兵たちを尻目に、ハナと春燕は、砂塵を巻き上げながら、並んで馬を走らせた。

「行こう」

私は立ち上がり、涙を流して嗚咽おえつするユキを促した。

「ハナさんは、私たちを逃がそうと、敵を引きつけたんだ。ぐずぐずしてられない」

ユキは、大勢の敵を引き連れ、地平線の彼方へと駆け去っていくハナを、じっと動かずに凝視していたが、やがて、私に問うた。

「ハナさんが、死ぬわけないわよね」

「ああ」

頷く私に、ユキは笑顔を作った。

「私、ハナさんを信じるわ」

私とユキは、哈爾濱ハルビンに向かって馬を走らせた。

傅家甸フイジャディン近くに戻ってきたのは、二時間後だった。私たちは馬を下り、無言で走りながら隠れ家へと急いだ。

隠れ家はひっそりと静まりかえっていて、内部の様子はうかがえない。足音を忍ばせながら近寄っていくと、不意に窓が開いた。

顔を出したのはソヒョンだった。笑顔で手を振っている。

驚いて玄関に走り、ドアを開けた。

食堂では、四人の男たちが股間を両手で抑えて、床に転がって呻き声をあげていた。

ソヒョンは両手を腰にあてがいがい、笑顔を見せていた。その傍らで平助が、壁に背をつけ、茫然と悶絶する男たちを見つめている。

縛られていたはずのソヒョンは、どんな手を使ったのか、四人の男たちを倒したのだ。

「たった四人、私、押さえつける、無理」  
ソヒョンは私に歩み寄り、愛らしく小首を傾げてみせた。

その十日後。

私はウラジオストックの日本総領事館の駐在武官室で、伊東大尉と向かい合っていた。  
「御苦労さんだったな」

伊東大尉は、食器棚から瓶を取り出し、私と自分の目の前にグラスを並べて葡萄酒を注ぎながら言った。

すでに、この間の経緯は報告書にまとめて提出し、伊東に直接語りもした。虚偽はまじえず、ただ、都合の悪いところは省いた。

「興漢会が、ロシアの支援を受けようとしていた事は、知っている。そうになると、清国が倒れて新しい国ができたとしても、満州の権益は日本とロシアいずれのものになるか、複雑怪奇な情勢になるところだった。正直、助かったよ」

葡萄酒を呑みながら、伊東大尉は語った。

「北京周辺の義和団は、八カ国連合軍が掃討にあたっていて、もはや壊滅状態といっている。ただ、その残党が、興漢会など清国政府顛覆運動に加わる事は、大いにありえるだろう。君の情報は、おおいに参考になる」

そう言つて伊東は、表情を緩め、冗談めかして言った。

「心残りは、水野ハナを我々の味方につけられず、いまだお目にかかれていない事だ。君が、妾にできなかったから、逃げられたようなもんだ」

私は苦笑するしかなかった。そんな私の面差しに、伊東は笑みをおさめて言った。

「いや、すまんすまん。たった一人で、三十人の敵軍を全滅させた女傑だ。妾にしる、などと失礼しごくな話だ」

意外な言葉を発すると、伊東大尉は窓に向かってグラスを差し上げ、それからグラスをテーブルにおいて挙手の礼をした。それが、ハナが姿を消した哈爾濱の方角に向けられている事に気づいた。

ハナと劉春燕の行方は、杳として知れなかった。ハナと別れて傅家甸の隠れ家に戻った時、ソヒョンは号泣しながら、なぜ、連れ帰らなかったのかと私を責めた。彼女が落ちついてから、私とユキは、あの平原で何が起こったかを詳しく説明した。それを聞いてやっと納得したソヒョンは、

「ハナさん、新手の敵、できるだけ、私たちから、引き離れた、そういう事、だな」と呟いた。

その後、私たち四人はウラジオストックに向かい、私は日本総領事館に伊東大尉を訪ねた。ソヒョンとユキ、橋田平助は、市内のホテルにとどまっている。

「それで、ロシア軍に探りを入れてみたのだが……」

と伊東が切り出し、私は身を乗り出した。ここに来る前に電報で、ハナがああ後どうな

ったか調べてほしいと依頼していたのだ。伊東大尉は言った。

「どうやらロシア軍は、水野ハナも、劉春燕も、仕留める事ができなかったようだ」

安堵の溜息をつく私に、伊東も微笑を浮かべて続けた。

「逆に、大勢のコサック兵が倒されたらしい。二人の賞金は、それぞれ十五万ルーブルに値上げされたそうだ。たいした女たちだ」

私は、頷きながら、意を決した。

まだ当分、日本には帰らず、この大陸に止まり、ハナを探そう、と。

「ところで……」

伊東大尉は、引き出しから一通の封筒を取り出し、私の前に置いた。

「君の実家からだ」

「実家から？」

私は大陸に渡る前、家族には、余程のことがなければ手紙は出さないように、と言い渡していた。一体、何が起こったのだろう。

封筒を裏返すと、差出人は私の母親だった。

「今、ここで読んでもいいか？」

私は伊東大尉に言った。伊東大尉は、驚いたような顔で頷いた。よほど私は真剣な面差しをしていたのだろう。

便箋びんせんを広げると、懐かしい母親の筆蹟ひんせきだった。短い文章で書かれていたのは、私の妻が重病で床に伏せているとの事だった。

「どうした？」

伊東大尉が心配げに問うた。私は正直に答えた。すると大尉は熱心に帰国を勧めた。

「ぜひ帰国したまえ。義和団の一件は取り敢えず落着がついたし、君はここに来て以来、まったく休む事がなかった。一時でもいいから、顔を見せてあげたらどうだ」

少し考えさせてくれ、と告げて総領事館を辞し、ソヒョンたちが待つホテルへの道を歩きながら、私の心は揺れ動いていた。

妻のことが気がかりではあったが、そもそも私が大陸に渡った動機は、台湾での悪夢に連夜うなされ、思いあまって生まれたばかりの娘ともども妻を射殺し、自らも死のうとう考えに取り憑つかれたからなのだ。

ハナやソヒョンと出逢ったことで、悪夢からは解放された。だが、帰国して妻子の顔を見たとき、また同じ悪夢に悩まされる日々が戻ってくるのではないか。それが恐ろしかった。

「お帰り、菊池さん、お腹なか、空いた」

ホテルに戻ると、ちょうど夕食の時間だった。ドアを開け、私を出迎えたソヒョンの笑顔に、せつない思いがこみあげてきた。

別れたくない……。

やはり、ここにいたい。

「食事しよう。ユキさんたちを呼んできてくれ」

思いは口にせず、そう頼むと、ソヒョンは「うん」と頷いて、隣室のドアを叩いた。ユキと平助が、私の部屋に顔を出し、

「お帰りなさい。どうでした？」

と問うた。私は、

「食堂で話す」

と言ひ、四人で食堂に向かった。

食堂に入って席につき、私たちの他はロシア人ばかりなのを確かめてから、私はまず、「伊東大尉によると、ハナと劉春リウチュンイェン燕は無事ようだ」

と言った。ソヒョンは

「やばし！」

と歓声をあげ、ユキは、

「ハナさんが死ぬわけない。そう信じていたわ」

と涙を拭い、平助は幾度も頷いた。私は続けた。

「もちろん行方は分からないし、高額の懸賞金がかげられたままだ」

「大丈夫」

ソヒョンは、ロシアの黒パンをかじりながら言った。

「ハナさん、簡単に、やられない」

私たちは、しばし、ハナの武勇談に話の花を咲かせた後、私は面差しを引き締めて口を開いた。

「それで、今後のことだが……」

ユキと平助が、面差しを引き締めた。私は言った。

「身の振り方を決めてほしい。もし、行きたい場所があるのなら、伊東大尉が手配してくれる」

「そのことだけれど、菊池さん」

ユキは改まって言った。隣の平助も、フォークを置いて両手を両膝そろに揃えた。

「平助と話したのだけれど、私たち、朝鮮に行きます」

驚く私とソヒョンに、ユキは続けた。

「平助が、密陽ミリヤンに行つて、罪を償つぐないたいと言うの」

彼は、朝鮮の密陽で地元女性とトラブルを起こし、逃げ回っている最中、農家に盗みに押し入り、鉢合わせしたその家の妊産婦を射殺してしまった。在留日本人と朝鮮人との間に、一触即発の事態となりかねなかった。地元警察は、平助が逃げ込んだ山中で見つかった、虎に喰われた死体を平助だという事にして、收拾した。

もし今、平助が密陽に戻れば、また、大変な事態が引き起こされるかもしれない。そう忠告したが平助の決意は固かった。

「今でも、死なせちまった女の人を、夢に見てうなされる事があるんです」

平助はそう言って俯うつむいた。胸が締めつけられた。ユキが言った。

「私も、一緒についていきます」

「ユキさんも？」

眼を丸くするソヒョンに、ユキは頷いた。

「ええ」

ユキは静かに言った。

「彼がやった事で、大勢の人が悲しい思いをしたはず。そんな人たちに謝るのは、とても勇気のいる事よ。平助は、強い男じゃない。だから私が支えてあげたいの……」

平助は、テーブルに眼を伏せながら泣いていた。

なんて幸せな男だろう。

ひるがえって私はどうだろう。台湾に赴いて、誤って射殺してしまった少女と、その両親の家族を探し出し、償いをするだけの勇気があるだろうか……。

「ねえ、菊池さん」

ユキは私を見て言った。

「戦争であれ、なんであれ、命のやりとりをすれば、死んだ側の恨みが残るわ。その恨みを、どんな方法を使っても鎮しずめないかぎり、争いごとは絶えないんじゃないかしら」

「そうだな」

私は頷いた。

「明日にでも、伊東大尉に釜山行きの手配を頼もう。それから、釜山総領事の幣原しではらさんに紹介状を書く。自首するにしても、やり方一つ間違えば騒ぎになりかねない」

すでに平助は、虎に喰われたことになって事件は決着が付いている。密陽の役人たちが、自分たちの非を認めて再び平助を裁判にかけてとは思えない。一番いいのは、他人に知られぬように平助が遺族に謝罪し、相応の償つぐないをすることだ。

「幣原さんなら、うまく取りはからってくれるはずだ」

「そだね」

ソヒョンが立ち上がった。泣いている平助に近寄り、その頭に接吻した。

驚いて顔をあげた平助に、ソヒョンは笑顔で言った。

「ちゃんと、謝れよ」

平助は深く頷き、手の甲で涙をぬぐった。ユキが言った。

「償いを終えられたら、私は、平助と二人で齊齊チチ哈爾ハルに行って、崔チエさんの洗濯屋を手伝いながら、ハナさんを探します」

それがいい。面倒見のいい崔なら、二人を助けてくれるに違いない。

「それで、菊池さん……」

幾度もお礼を述べた後、ユキが言った。

「あなたは、どうなさるの？」

私はしばし答えを躊躇<sup>ためら</sup>ったが、やがて、妻が重篤であることを告げた。

「それは、すぐ帰国なさらないと！」

ユキが叫ぶように言った。平助も、

「そうですね、一日も早く、奥様に顔を見せてあげてください」と唱和した。

ただ、ソヒョンだけが、無言で私を見つめていた。

夕食を終え、部屋に戻った。

私とソヒョンは同室だった。ランプに火をともしてからドアをしめ、鍵をかけた。

「おやすみ、菊池さん」

ソヒョンは、ベッドに飛び込み、私に背を向けて丸くなった。その小さな背中にかけた言葉を、しばし、私は呑み込んだ。

一緒に、日本に行かないか？

この半年、悪夢から解放されている間、私は常に、ハナかソヒョンと一緒にだった。ハナよりも、ソヒョンと行動をとりにした時間のほうが、はるかに長い。

彼女と一緒になら、また悪夢に悩まされる事もなく、妻子と接する事ができるのではないだろうか。

有り体にいえば、ソヒョンと離れるのが恐<sup>こわ</sup>かったのだ。

ふと、ソヒョンがこちらを振り向いた。

「どした？」

少し身を起こし、優しく問いかけてきた。

「なあ……」

私は、言った。

「これから、どうするつもりだ？」

「そだね……まだ、考えてない、けど……」

ソヒョンは天上を見上げて呟<sup>ささや</sup>いた。

「菊池さん、日本に帰る、でしょ？」

私は答えなかった。ソヒョンは続けた。

「ユキさん、朝鮮、行く。そして、私……」

それきり、天上を見つめたまま、口をつぐんだ。

「私……どうしょ……」

「なあ、ソヒョン」

私は思いきって問うた。

「一緒に、日本に行かないか？」

ソヒョンは眼を丸くして、私を見つめた。私は続けた。

「しばらく、私と一緒に、日本で過<sup>すご</sup>さないか。ソヒョンはずっと、戦い続けてきた。し

ばらく、物見遊山ものみゆうざんにでかけたり、芝居を見たり、骨休めをしたらどうだね」

ソヒョンは、瞬きもせずに私を凝視していたが、やがて口を開いた。

「そういうの、考えて、なかった……でも……」

につこり笑って、彼女は言った。

「それ、いいかも、だね」

そう言って、再び私に背中を向け、ベッドに丸くなった。やがて寝息が聞こえてきた。

私はしばらく寝付けなかった。

ソヒョンと一緒に日本へ行く。そう思うと、胸が弾はんだ。どんな場所に連れて行ってあげようか。何をご馳走してあげようか。それを考えるだけで、ベッドを飛び降り、躍りたくなるほど、私は昂揚きやうしていた。

翌朝、ユキと平助は、ウラジオストック市内に買い物に出掛けた。釜山行きに備え、新しい服を整えるのだという。私は、日本総領事館に伊東大尉を訪たずねる事にした。

ソヒョンは、

「じゃ、私、お留守番」

と笑顔で手を振り、私たちを見送った。

総領事館の駐在武官室で、伊東大尉に自分たちの希望を伝えると、

「そうか、俺もそれがいいと思う」

と即答し、帰国の手配を約束してくれた。四人一緒に同じ船でウラジオストックを出国し、ユキと平助とは途中釜山で別れ、ソヒョンと私は神戸まで行く。

「書類が整い次第、すぐ知らせる」

と言う伊東大尉と、握手して別れた。

総領事館を出ると、すでに十月、ウラジオストックの秋はすでに去っていた。街路樹から枯れ葉が舞っている。昨年の夏ここに来てから、二度目の冬を迎えようとしていた。

外套の襟えりを掴つかんで風を避けながら、私はホテルへの帰路を急いだ。

「ただいま」

部屋のドアを開けた。

誰もいなかった。

部屋にはベッドが二つ並んでいた。ソヒョンが使っていたベッドは、きれいにシーツや毛布が畳まれていた。彼女の荷物もなくなっていた。

テーブルに便箋びんせんが二つ折りに畳まれ、インク壺つぼを重石おもしにして置いてるのが眼に入った。

胸騒ぎを抑えながら、便箋を開いた。

ソヒョンの筆蹟ひんせきだった。

彼女は、前々からハナに日本語を習っていて、私も暇ひまがあれば、字を教えていた。聡明な彼女は、雨が地にしみこむように覚えた。平仮名だけで間違いも多いが、きれいな字だった。

手紙を読み終えた時、私は絨毯じゅうたんを敷いた床に座り込んでいた。涙がとめどなく溢あふれた。

菊池さん。

私、昨夜、一晚、寝ないで、考えました。夜が明けるまで、考えました。

一緒に、日本に行く。

多分、菊池さんは、そのまま、日本にいる。

日本にいて、奥さん、看病する。

私、日本で、何をする？

日本人になる？

日本の、学校、行く？

それも、いいかな、と思いました。

私は、ずっと、戦って、きました。

少し、お休み、それも、いいかな、と思いました。

でも、目が覚めて、朝ご飯食べて、菊池さん、ユキさん、見送った後。

部屋に戻って、最初に、私がしたこと。

それは、ナイフを研とぐこと、だった。

私、気が付いた。

私、戦うしか、できない。

私、菊池さんのこと、好きでした。

ハナさん、同じ事、言っていました。

私、初めて、会った時、菊池さんの、きんたま蹴きった。

でも、菊池さん、怒らなかつた。

菊池さん、優しいし、ハナさんのため、私のため、一生懸命。

そんな男の人、初めてだと、ハナさん、言っていた。

私、父がいまません。父のこと、覚えていません。

ひよっとしたら、父が生きてたら、菊池さんみたいな人だったら、よかつたな。

ほんとに、そう、思いました。

でも日本に帰ったら、菊池さんは、娘さんの、父になる。そうならないと、いけない。

菊池さんの、ほんとの娘さんに、菊池さん、返さなきゃ。

私、決心しました。

私、すぐ、ウラジオストック、出ます。

ハナさんを探します。

また、ハナさんと、馬賊、やります。

私たちは、馬賊。



朝起きたら、ナイフ研ぐ、寝る前に、銃の手入れする、馬賊。

菊池さんは、娘さんの、お父さん。奥さんの、旦那さん。

菊池さんなら、奥さん、治せます。

菊池さんは、奥さんが治るまで、ここに、来ちゃだめ。

さよなら。

ユキさんと、平助に、よろしく。

釜山で、静枝さんや、春美さんに会ったら、よろしく。

五世（そひよん）

菊池真清の手記は、ここで終わっている。

私にこの手記を託した真清の孫が、一ヶ月前に亡くなった事は最初に記した。老人の家には、この手記の他に、真清が残した書類が数多く残されていた。旅券、渡航願、任命書、政府への請願、軍歴などだ。それらの資料に加え、さまざまな資料をあさった。そして、その後の菊池の生涯を、ある程度たどることができた。

ソヒョンが姿を消した後、菊池は帰国した。彼の妻は、病から回復したらしく、三十四年後の昭和九（一九三四）年まで存命している。その後、子宝にも恵まれ、子どもたちは無事成人して社会に出たり、嫁いでいるから、帰国後に「悪夢」に悩まされる事はなかったのだろう。

その後も菊池は、しばしば満州やシベリアへと赴いた。

帰国して四年後の明治三十七（一九〇四）年、日露戦争勃発とともに、菊池は陸軍に復帰し、第二軍司令部付きとして満州を転戦した。

日露戦争が終わるとともに、再び予備役となった菊池だったが、彼はすぐにまた満州に渡り、旅順を根城に渤海湾の海運業者向けの保険事業に乗り出している。これは失敗し、一年で帰国した。その後も彼は、日露戦争で日本が権益を得た満州での事業を摸索し続けたが、いずれも頓挫した。

大正六（一九一七）年、ロシア革命が勃発し、ソビエト連邦政府が樹立された。翌年、日本など社会主義の拡大を恐れる列強は、反革命軍を支援すべくシベリアに大軍を送った。五十歳をすぎた菊池は志願してシベリアに渡り、諜報活動に従事した。

満州やシベリアでの内戦を経験した菊池は、対外膨張を続けた戦前の大日本帝国には必要な人材であり、実際、大いに活用させられた。だが、当の菊池には、そういう国策とは別の動機があったのではないか。

シベリア出兵後の菊池は、公務にもつかず余生を送った。昭和二十（一九四五）年七月、日本の降伏を知らぬまま、七十八歳で死去した。

結局彼が、ハナヤソヒョンと再会できたかどうかは、分からない。朝鮮に渡ったユ

キや静枝、春美、平助らのその後も不明だ。

ただ、彼が遺した膨大な書類をおさめた箱の一番底に、二枚の原稿用紙に綴られた不思議な文章があった。末尾に「父が、臨終の日の朝、最後に書きとどめた」と、息子のものらしい筆跡で記されていた。

以下、原文のまま引用する。人生の最後の瞬間、菊池真清の脳裡に浮かんだのは、やはり彼女だった。

こんな夢を見た。夢にハナが現れた。

初めて、アムール川を往く船の甲板で出会った時と同じやうに、分厚い綿入れに、ロシア帽をかぶり、支那の少年のやうに装っている。

ハナは笑顔で、かう云った。

お前、ずいぶん老けたな。そろそろ彼方に行くのか？

彼方と、ハナは云った。と云ふことは、まだ彼女は此方にゐるのか。

ハナなのかい、と私は訊ねた。

まだ、お前は生きてゐるのかい？

妾が簡単に死ぬるわけないだろう、とハナは笑った。

きんたま潰さなきやならない奴が、次から次に現れる。義和団だったり、コサツクだったり、日本軍だったり、妾、休めないよ。

いや、そろそろ戦争は終わるよ、と私は云った。もう、大日本帝国は負ける。日本が負ければ、満州は平和になる。さうなつたら、ハナ、日本に戻つてこないかい。

もう一度、会わないか？

お前は矢張り、お前だ、とハナは笑った。

妾もお前に会いたいけれど、でも、無理だ。日本軍がゐなくなつても、ソ連軍が来るし、中共軍も来る。アメリカも手を出してくる。

世界中の男に、きんたまついてるかぎり、戦争はなくならない。潰さなきやいけないきんたまがあるかぎり、妾は戦ふよ。

お互いに、死んだら、あの世で、ゆつくり、語りつくそうぜ。

(おわり)